



Title	パキスタン構想と民族問題（下）
Author(s)	ラーフル, サークリテイヤーヤン
Citation	印度民俗研究. 1974, 2, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50351
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

パキスタン構想と民族問題 (下)

ラーフル サークリテイヤーヤン

4. パキスタンとインド

最近、我国では、パキスタン構想¹と統一インド²の問題が大きく取り沙汰されている。そもそもパキスタン構想なるものは、インド人が自らを統一単一民族国家を形成する努力を怠り、幾世紀にもわたって惰性的な生活に甘んじてきた結果として生じた問題である。今日多くの人々がパキスタン構想の提唱者達を反民族的な売国奴だと決めつけて、この重大な問題を葬り去ろうとしている。さて、そこで、この問題について少し冷静に考えてみることにしよう。

(1) ヒンドゥー教徒の狂信性

イスラム教徒を狂信的だと言って非難するヒンドゥー教徒がいるが、そういう人はヒンドゥー教徒は狂信的ではないと思いこんでいるのである。ヒンドゥー教徒は、イスラム教徒の手になるローティーや水や、バーンを食べようとはしない。そのくせヒンドゥー教徒が狂信的でないとは、よくいえたものだ。つい先頃、デリーのある著名なイスラム教徒が、新聞に次のような体験を書いていた。デリーの某所にヒンドゥー教徒専用の冷水飲み場があった。夏の盛り、喉が渇いて冷たい水が飲みたくなるのは、これ人情である。で、先のイスラム教徒の紳士、「冷たい水を一杯」というわけで水飲み場に入った。するとどうだろう。こともあろうに、「心ひろき」ヒンドゥー教徒がこの紳士に対して、屋外へ出てカンカン照りの路上に立ち、木製の長い樋に手をあてて、手ですくって飲むがいい、とのたまったというのである。いやしくも自尊心のある人ならば、このような侮辱にどうして耐えられようか。これをしても狂信ではないというヒンドゥー教徒がいるならば、その人は、少なくとも常識的に見て、思考力を失ってしまっている。デリーのこの水飲み場の管理人は、統一インドに一人でも自尊心のある人が留まることを潔しとしないことは自明である。そしてこのことがもとでパキスタン要求の声があがっているとすれば、これは何ら驚くべきことではない。

統一インドというからには、単一国家であると同時に単一民族でなくてはならない。相互の会食はおろか、通婚³さえも自由にできないような状態のままの単一民族国家など何処にあるのか。通婚の自由は、単一民族としての意識を醸成するのに必要不可欠のものだ。イスラム教徒は、通婚に関して柔軟な態度をとることも考えられるが、ヒンドゥー教徒の方は、あくまでも通婚を拒絶する。我々の民族指導者達が、カーヤスト⁴とかラージプート⁵とかブラーフマン⁶とかいった殻を破ろうとしないかぎり、統一インドという単一民族の形成を、少なくともそうした指導者連中に期待するわけにはいかない。ヒンドゥー教徒は、菓子、プーリーという油揚げにしたパン、ソーダ水、ラムネなどの類の飲食物を売る店を独自に設けている。これは偏に金もうけのためなのであ

る。ヒンドゥー教徒は、イスラム教徒が経営する飲食店を徹底的にボイコットし続けてきた。そして、ヒンドゥー教徒が経営する店だけで買物をしようと、しめしあわせてあつたのである。これらは皆、この民族主義の時代にあつて、ヒンドゥー教教義の名の下に行なわれているのである。これが狂信性でなくて何であろうか。

(註)

1 本誌創刊号 P.14, 訳註(1)を参照。

2 同上

3 宗教を問わず同一カースト内の内婚制を一大特徴とするインド社会では、異教徒間の通婚は更に一層困難である。尚、イスラム教徒、ヒンドゥー教徒の婚姻習慣について、詳しくは、創刊号 P.47～53, P.78～79を参照。また、異教徒間の通婚が困難かつ暴動に発展することさえある事例として、鳥羽嶺次郎著『にがいインド』（読売新聞社、1970年）P.37～40を参照。

4 Kayasth 教育程度が高く、知的活動に従事する者が多い。創刊号 P.62～63を参照。

5 Rajput ヴァルナ（種姓）制序列ではバラモンに次ぐクシャトリアに属するとされ、ヒンドゥー社会で高い地位を占める。自らは古代のクシャトリアの直系であると自認し、それを証拠づける様々な伝説を持っている。しかし、その起源については、5・6世紀頃中央アジアから侵入してきた白匈奴やシャカ族等の外来諸民族が、在地の旧支配層と混合し、徐々にヒンドゥー教を信奉しつつ、その社会体制に組込まれた等の異民族起源説が、現代の歴史家の間では有力である。彼等はハルシャヴァルダナ王（在位606～647 A.D）の帝国の崩壊以後の「暗黒時代」を終焉させ北インド・西部インドに諸王朝を成立させた。しかし、続いて起つたムスリムの北インド侵入で退散し、北インド・西部インドの各地に離散し、或いは在地土豪として定着し或いは新たに王国を建設し、ムスリム勢力に対応した。特に、ラージャスターン地方では、近代まで独自の体制を維持し続け、彼らの強力な根拠地となつた。尚、「ラージプート体制」について更に詳しくは、深沢宏「デカン諸王国とラージプート体制」『岩波講座・世界歴史』第13巻（岩波書店、1971年）を参照。

6 言うまでもなくブラフマン（婆羅門）は、ヴァルナ（種姓）制度に於いて他のクシャトリア、ヴァイシャ、シュードラを凌ぎ最高位を占め、祭祀に携わる特権的階級である。村落社会の社会経済的階層序列^{ヒエラルキー}に於いても多く最上層を占めてきた。そのため、英植民地支配と付随的な近代化の中で生まれた専門職——官吏、法律家、教師、医者、技師等——に就く者が多く、知識層を形成して政治家を輩出し、政治に大きな力を振つた。

(2)言語問題

言語紛争、即ちヒンディー語とウルドゥー語の紛争¹が問題になっているのは、ビハール州連合州、中央州、デリー、パンジャブ州、その他若干の藩王国にすぎない。我国の民族指導者達はこの紛争の解決に努めてはいるが、「生兵法は大怪我のもと」である。相異なる二つの文化が両言

語を全く別途に発展させてきたのだが、他ならぬこの両文化の対立がヒンディー語・ウルドゥー語紛争に於いても背景をなしている。ヒンディー語・ウルドゥー語に代えてヒンドスターニー語²を採用すべきだ、という意見もある。多くの人々が、「両言語を足して2で割るのが一番だ」というわけで、ヒンドスターニー語という名称で呼ぶつもりでいる。しかし もう少しよく考えてみるなれば、そのようなことが骨折り損のくたびれ儲けであることは自明である。ここで、まず注意すべきは、ヒンドスターニー語の名を以って新言語の創造を意図しているが、これには既存言語を利用しているという事実である。もし既存の言語を用いるのなら、サウダー³、ガーリブ⁴、イクバル⁵の言語たるウルドゥー語をして、スール⁶、トゥルシー⁷、プラサード⁸、パント⁹の言語たるヒンディー語に同化させることはいかなる魔法を以ってして不可能である。両言語の間は共通性もあるにはあるが、一方を立てれば他方が立たずである。我国の民族指導者が、現存の言語の代りに新言語を創造するというような気まぐれにとりつかれなかったなら、こんな馬鹿げたことはしなかったろう。即ち、ビハール州のヒンドスターニー語委員会は、ヒンドスターニー語の専門用語集¹⁰を作成した。この専門用語集についてウルドゥー語を使うイスラム教徒の中には、サンスクリット語系の専門用語が多すぎる、という不満がある。一方、ヒンディー語を使うヒンドゥー教徒にはアラビア語系の専門用語が多すぎるという不満がある。この科学時代に、専門用語がいかに必要とされているか。これは言うまでもないことである。そして、専門用語問題という大岩に激突して、ヒンドスターニー語という小舟は木端微塵である。ヒンディー語及びウルドゥー語の各々の古今の文献を注意深く見れば、両言語はそれぞれ独立しており、一つの源から発生しておりながらも最早その原型に復原できない程までに別個の道をたどって発達を遂げてしまっていることが判明しよう。哲学に関する文献を例にとってみるがいい。ヒンディー語使用者は、哲学書を著わす際にはウパニシャド時代（西暦前700～600年）から現代までに書き著わされてきた膨大なサンスクリット語の哲学文献を参考にする。グジャラーティー語、マラーティー語、オリヤー語、ベンガル語の使用についても事情は全く同じである。ところがウルドゥー語使用者は、哲学書を著わすに当って、ファーラービー¹¹やローシュド¹²がその著作に用いたアラビア語系の専門用語を用いている。同時に彼らはエジプト、シリア、イランの現代アラビア語文献で用いられるようになった新専門用語も取入れている。占星学や医学についても同様である。以上のことから明らかなように、両言語のうちのいずれかが、折れることを余儀なくされるのであれば、その長い発展の歴史を無視することになる。

ヒンディー語及びウルドゥー語をそれぞれ別個の言語として認めた上で、相互の文芸に対する理解を深めるための手がかりを見出すことは可能である。そして、それは、ヒンドスターニー語ではなく、ヒンディー語にしる、ウルドゥー語にしる、そのものを介して直接に見出すべきである。1500語の共通語を集めたところで、今日の時代にあつて、文芸の用に供すに足る言語を創造することは、出来ない相談である。

ウルドゥー語に関してイスラム教徒が要求を提出した場合、これをコミュニナリズム的偏向だときめつけて封ずることはできない。それどころか、ある言語を他の言語で踏みにじり抹殺してし

まおうとすることこそ、コミュニズム的偏向を示すものである。

(註)

1 インドに於ける言語紛争は、勿論、ヒンディー語対ウルドゥー語に限らないが、この場合ラールは、ヒンドゥー教徒対イスラム教徒のコミューナル対立を背景とした言語紛争を指している。しかし、そのような言語紛争にしても、ヒンディー語対ウルドゥー語だけとは限らない。

尚、ヒンディー語とウルドゥー語の文法体系は同一である。両者の相違点としては、文語に関して、前者が主に名詞。形容詞。副詞に於いてサンスクリット語系の単語を比較的に多く含みナーガリー文字で記されるのに対し、後者はペルシア語。アラビア語系の単語を多く含みアラビア文字で記される。しかし、口語（日常会話）に於いては、ほとんど両者に相違はない。しかも、大部分の大衆は文盲なのである（インド連邦に於いて1961年現在、文盲率76%）。

2 Hindustani 周知の通り、インドには多数の言語が存在し、言語的な共同体が形成されていた。これらの共同体の枠を超えて、前近代から大衆レベルで行なわれていた商業活動。宗教活動によって生じた共通語（Spoken trade or Bazaar languages）のうち、北インドを中心に使われていたものをヒンドゥスターニー語という。ところが、1920年代後半以後は、独立運動と平行して行なわれた言語近代化運動の過程で、回印融和という政治的要請を踏まえて、M. K. ガンディーをはじめとする会議派の運動家たちによって、語彙がサンスクリット語にもペルシア語。アラビア語にも偏しない、「両者の中間的な言語」の意味に用いられるようになった。本項(註)10を参照。

3 Muhammad Rafi Saada (1731~80) デリーに於ける初期のウルドゥー語詩人。聖者王侯を称讃するカスィーダという詩体の第一人者とされ、他方、ムガル朝の腐敗、役人の不正を痛烈に皮肉ったことでも知られる。

尚、インド文学史について詳しくは、田中於菟弥編『世界の文学史9 インドの文学』明治書院1967年（ここで関連のある近世以降の文学史は坂田貞二氏の分担執筆）を参照。

4 Mirza Asadullah Khan Galib (1796~1869) トルコ系のイスラム教徒詩人。U. P州アグラで生まれ、カルカッタ、デリーで教育を受けペルシア語で詩作したが、後ウルドゥー語詩を作るようになった。彼の詩の題材は広く、古代から現代の世事にまで及び、不合理な宗教的。社会的旧弊の諷刺もした。彼の業績で特に注目されるのは、平易な語彙を用いて現代ウルドゥー文語の基礎を築いたことである。

5 Muhammad Iqbal (1873~1938) バンジャブ州出身イスラム教徒の詩人。哲学者。政治家。早くから愛国的。民族的詩人として知られたが、英。独に留学（1905~8）以後、自我（Khudi）の確立を目指す自我主義に傾き、この思想を詩を以て表わした。更に展開して、理想的なイスラムの精神的共同体を描くが、これは、やがて彼が1930年ムスリム連盟議長に就任したときの演説に於ける 'North West Indian Muslim State' に発展する。この発想は、当時は顧られなかったが、僅か10年後の1940年3月ムスリム連盟ラホール大会「パキスタン決議」に結実したことは既に述べた（創刊号P. 14(註)1）。晩年に至って、ムスリム連盟の指導者ジンナーに強い思想的影響を与えた。

詳しくは、加賀谷寛「インド・パキスタンにおけるムスリムの現代思想史——1」『大阪外国語大学学報』第13号（1963年）、同「パキスタン国家形成におけるイスラム思想の役割」『東洋文化』38号（1965年）、黒柳恒男「インドの思想家たち」『講座・東洋思想7 イスラムの思想』東大出版会、1967年を参照。

6 *Surdas* (1503?~63?) 近世のバクティ信仰の一派クリシュナ派の八詩仙の筆頭で詩集『スール・サーガル』*Sur Sagar*を残す。彼の業績は、バクティ信仰を甘美に表現したことその他、当時はまだ一方言にすぎなかったブラジ方言を文学の具として洗練し後のヒンディー文学の主要な媒体に押し上げた。（坂田、前掲書）

7 *Gosvami Tulsidas* (1523?~?) バクティ信仰の一派ラーマ信仰に基いた代表作の叙事詩『ラーマ・チャリット・マナーサ』*Ram Charit Manas* を以ってヒンディー文学に金字塔を打ち建てた。アヴァディ方言による彼の作品には、必要に応じてペルシア語、アラビア語の借用語が自由に取り入れられているが、サンスクリット借用語の多い典型。その他ブラジ方言でも著作。（坂田、前掲書）

8 *Jaysankar Prasad* (1890~1937) ヒンディー語詩人、小説家、戯曲家。連合州ベナレス出身。ニラーラー、バント等と並ぶチャーヤード（陰影主義）の詩人で、ブラジ方言とカーリー・ポーリー方言で数多くの作品を発表。題材を原始・古代・中世に採った叙事詩を志向したことは、他のチャーヤード詩人に見られない特色。その代表作は、『カーマヤーニー』*Kāmayāni* (1935)。（坂田、前掲書など）

9 *Sumitranandan Pant* (1900~) ヒンディー語詩人、小説家、劇作家。現在のU.P.州アルモーラー県出身。少年の頃より詩作を始め、第1次非協力運動の中に青年期を迎えたが、これには不参加。独立後、ラジオを通じて活躍。政府から国家的功労者としてパドマ・ブーシャン賞を与えられたが、1967年12月公用語法案に反対してこれを返上。彼の詩は、浪漫的、神秘的象徴的な傾向の強いものである。精神主義のみにとらわれることなく世俗の人生の価値を見出すことにも努めたが、精神主義の面でも新しい境地を開いた。（坂田、前掲書など）

10 近代語としては未熟であったヒンディー語の育成。近代化活動は、19世紀末から始められ、識字活動と同時に、西洋文明の結晶たる人文・社会・自然科学等の専門学術用語の訳語造りが各民間機関の手で行なわれた。独立後は、政府の手によって実施された。ラーフルも、この作業に参加している（創刊号P. 13）。

以下に、インドの言語近代化運動史の一端を概説しておく。

近代ヒンディー語の組織的な普及運動は、1893年のナーガリー文字普及協会 *the Nagari Pracharani Sabha* (ベナレス) を以って始まった。インドの民族意識の覚醒。昂揚にともない1910年には政治的色彩を帯びた会議派系のヒンディー語文芸会議 *the Hindi Sahitya Sammelan* (HSS) (アラハバード) が設立され、ガンディー等もこれに参加した。しかし、このHSSは、次第にヒンドゥー・サンスクリット文化を偏重し純粋（すなわちサンスクリット化された）ヒンディー語に固執する一派に牛耳られるようになり、ついにガンディー、ネルー等はHSSを脱退し、

1942年に新たにヒンドゥスターニー語普及協会 the Hindustani Prachar Sabha を組織した。彼らの意図したところは、地理的には連合州（U. P）西部、デリー、パンジャブ州東部を中心として大衆の国語に沿ったヒンディー語を育て普及することだったから、専門語は、ペルシア語、サンスクリット語、英語を問わず大衆に最も親しまれている単語を借用・採用した。ところが、元来北インド東部のアヴァディ方言を基盤としたHSSは、独自のヒンディー語検定制度を施行し、これを媒介に影響力を拡大し、その配下に著名な文芸家を集めたヒンディー文語の学派が成立する程で、こうして形成されるヒンディー語は、増々サンスクリット語色の濃いものへと傾いた。独立後インド政府は言語育成政策を進めたが、ガンディー主義者たちは言語計画への展望を欠いていたために、政府言語委員会はHSS系で編成され、公用ヒンディー語も新訳語も極めてHSS的なものになってしまった。言語育成政策は、サンスクリット語に準じた復古化促進と同義になってしまっている。その結果、標準ヒンディー語育成政策が、ヒンディー語を大衆の口語から離反させるという矛盾を招いた。こうして、ヒンドゥスターニー語という近代語としては未熟ながらも共通語はぐくんだ大衆は無視された。

詳しくは、Jyotindra Das Gupta & John J. Gumperz "Language, Communication and Control in North India" / LANGUAGE PROBLEMS OF DEVELOPING NATIONS / ed. by New York, 1968を参照。本項(註)2を参照。

グジャラート語 インド・ヨーロッパ語族。現在、グジャラート州公用語。主にグジャラート州で話され、グジャラート人が多数移住したボンベイ市とその周辺でも話される。ショウラセーニ語（創刊号P. 15(註)4参照）から発展したナーガル・アバブランシャ語が更に発展した言語。12, 3世紀頃からグジャラート語作品が現われ始めた。文字は、ヒンディー語のデーヴァナーガリー文字によく似た固有のグジャラート文字。言語人口1964年現在約2030万。（Dr. Bholanath Tiwari, 'Bhasa Vigyan Kos' Varanasi, 1964など。以下(註)19～21も同じ）

マラーティー語 インド・ヨーロッパ語族インド・アーリア語派。同語派の言語の中で最西南に分布し、マハーラーシュトラ州公用語。サンスクリット語からの直接の借用語が非常に多い。碑文を除き文章語として現われたのは12世紀以降であるが、豊かな中世宗教文学を持つ。文字は、ヒンディー語と同じデーヴァナーガリー文字。言語人口1961年現在約3329万。

オリセー語 インド・ヨーロッパ語族インド・アーリア語派。オリッサ州公用語。オリッサ州及びその周辺地域で話される。マーガデーー・アバブランシャ語の南部支派と関係がある。碑文。文芸作品ともに11世紀頃出現。文字は、古代ナーガリー文字にテルグ文字やタミル文字の影響を受けて発達したもので、非常に複雑。言語人口は1961年現在1572万。

ベンガル語 インド・ヨーロッパ語族インド・アーリア語派。独立前のベンガル州、現在のバングラ・デーシュ及びインド共和国西ベンガル州で話され、両者の公用語。プラークリット語の1種マーガデーー・アバブランシャ語東部形から発達し、マラーティー語と同様にサンスクリット語からの直接の借用語が非常に多い。他の地方語と同じく西暦1000年前後に成立し14世紀以降文芸作品を生み、比類のない文学の宝庫を築き上げた。近年では詩聖タゴールは有名。それ故、ベ

ンガル人の母語ベンガル語に対する誇りは極めて高く、独立後の西ベンガル州は、ヒンディー語公用語化反対運動の最も激しい地域の1つ、文字は固有のベンガル文字、言語人口は1961年現在約8400万。

11 al-Fārābī, Abū Naṣr Muḥammad b. Muḥammad (870頃～950 A.D.) イブン・セナー (ラテン名 Avicenna) 以前のイスラムの偉大な哲学者。アリストテレスの注解者として有名。彼は「範疇論」。「第一哲学」。「第二哲学」など注解し「第二の教師」 al-mu'allim al-thānī 即ち、アリストテレスの後継者と称される。(『東洋史辞典』創元社、1961年)

12 Ibn Rushd, Abū al-Walīd Muḥammad b. Aḥmad (1126～98 A.D.) 合理主義的立場に立つイスラム法哲学者。アリストテレス哲学の最後で最大の注釈家として名高く、イスラム世界での積年のアリストテレス研究の遺産をまとめて、中世ヨーロッパのスコラ哲学に引き渡す役割を果たした。(鶴田彌平「イスラム思想の発展」『講座東洋思想7 イスラムの思想』東大出版会1967年、P. 109～11)

(3) 反民族的ということ

非常に多くの統一インド論者が、イスラム教徒には民族意識が稀薄であると思いこみ、そのように主張しているのが見受けられる。それを裏付けるものとして、国家のために犠牲となった殉教者及び政治犯の名簿を持ち出す。それでもって、イスラム教徒が、国家に対していかに献身的でないかを見せつけようというわけである。これを根拠に、イスラム教徒は生命への執着が強い。即ち、臆病だともいいたいのである。だが、コミューナル暴動を目撃したことのある者なら、イスラム教徒が命を投げだすのに少しも吝かでないことをよく知っている。今日のところは、単に宗教上の問題に限ってそのような勇敢な態度をとっているにすぎないわけだが、パキスタン構想の実現のために必要となれば、明日は政治的目的のためにも同じ態度に出るに違いない。パンジャブ州のカークサル団¹や、辺境州のバターン族²は、弾丸の雨の中で大胆不敵な態度を示し、その誹謗中傷が真赤な³ものであることを証明した。

臆病というのは、大抵、食べる物も食べないでせつせと小銭をためることに通じている人の中にみられるものである。ところが、イスラム教徒は飲食物に贅をつくすとか金遣いがあらいかいというので評判が悪い。こうしてみると、彼らは臆病になるのに必要なものをあまり持合せてはいないことになる。実際、臆病というものは、金持連中だけの持物なのだ。

(註)

1 Khaksar ケンブリッジ大出のイスラム教徒マシュリキ (Ināyat Allāh Khān Mashriqī) がヒットラーに会見後、その影響を受けて1931年に設立したファシスト色の濃い結社。国家の建て直しをその目的として、イスラム教を基軸に軍事訓練と社会奉仕を二大規範とした。世界恐慌。第2次非協力運動の挫折、コミューナル対立の激化等の混迷の30年代にあつて、都市ブチ・ブル層上層労働者層を多く引きつけた。1939年以後、軍事的行動をおこし政府との衝突をくり返し非

合法化された。1942年に領袖マシウリキーが獄中転向し翌年非合法を解かれたが、すでに単なる社会奉仕団と化し行動力を失った。

(Wilfred Cantwell Smith, ' Modern Islam in India ', 1946, P P. 235~245 ;
Amalendu De: ' Khaksar Andolaner Itihāsa ' Calcutta, 1968 邦訳 佐藤宏訳『印・パ分離への道——あるイスラム思想家の悲劇』〔アジアを見る眼〕シリーズ38, アジア経済研究所, 1970)

2 Pathan (英 Pathan) 元来アフガニスタン及びインド(現パキスタン)の北西辺境州に住する半遊牧民族で、人口約千六百万で母語はパシュトゥー語、宗教はイスラム教である。その気質は勇猛で鳴らし、英勢力に激しく抵抗して北西辺境州に半自治を保持した。パキスタン成立後は、バードシャー・ハーン(辺境のガンディー)の指導の下に独立運動が続けられており、その帰属をめぐってアフガニスタン・パキスタン両国の紛争の火種になっている。

その一部は、15・16世紀頃からインドに移住。

(4)パキスタン要求の拒否は政治的破綻

民主的権利に基いて独立、自決を要求する者は、決して、いかなる州に対してであれ、当該の住民の多数の意志に反して併合を強要することはできないはずである。周知の通り、インドには、イスラム教徒が住民の過半数を占める地域がいくつもある。シンド、バロチスタン、辺境州、西パンジャブ、西カシミール一帯ではイスラム教徒が多数を占めている。同じことは東ベンガルについても言える。統一インド論を標榜するヒンドゥー教徒が、こうした地域の住民の意志に反して住民をヒンドゥー教徒の下に併合することがあつてはならない。どんな国際裁判所に提訴したところで、彼らの勝目はあるまい。今なお、これらイスラム教徒多数派地域の住民は完全な自決権は要求してはいないと言い立てる人が教多くいる。アラーハーバードで開かれた会議派全国委員会では、最近までヒンドゥーサーバーに所属していた一紳士の提出になる統一インド支持決議案をヒンドゥー教徒達の賛成によって可決した上で、イスラム教徒大衆も同意見であるとの見解を出している。だが、この全国委員会に於いて投じられたイスラム教徒の票及びその後表明されたイスラム教徒指導者達の意見を注意深く検討してみれば、趨勢は一目瞭然となるだろう。早い話、この委員会に於いてさえ、パンジャブ州会議派議長イフティカール・ウッディーン氏¹は、ラージャーゴーパーラーチャーリー氏²の案³に賛成票を投じた。辺境州国民会議派議長⁴は、声明を発表し自決権に賛意を表明した。同じ趣旨の声明を、ジャミーヤト・アル・ウラマー⁵、アフラル党⁶など数多くの統一インド論支持の諸団体に構成しているアーザード・ムスリム会議⁷の書記長も発表している⁷。インド・ムスリム連盟は、一貫して独自の政策を表明して来ている。にもかかわらず、パキスタン構想即ち自決権要求をなんの権限があつて一蹴するのか、この要求を認める際に課し得る条件といえ、せいぜい最終決定が当該地域の住民の意志に委ねられるべきことぐらいである。

インド・ムスリム連盟外の統一インド論支持のイスラム教徒がパキスタン要求に関して自らの見解を表明したのは、実のところ、イスラム教徒大衆を自派に引き留めておきたいからに他ならな

い、もしも今この位明確な態度を打ち出さずにいようものなら、彼らはイスラム教徒を代表する資格を失ってしまうのである。⁹

(註)

1 Miyan Iftikhar 'Uddin (1908~1962) 分離独立前、ラホールにて英文日刊紙「パキスタン・タイムズ」を発行。本文にあるように会議派に所属したが、当時統一戦線路線をとっていたインド共産党から強い支持を受けていた人物だったという。分離独立後、パキスタンのパンジャブ州内閣の避難民厚生相。1956~7年、バーシャーニーとアブドゥル・ガッファール・カーンとともに野党「ナショナル・アワミ党」を設立。(アイユーブ・カーン著パキスタンの再建—加賀谷・浜口共訳、1968—参照)

2 Pajagopalachari, Chakravarti (1878~1972) マドラス出身のブラフマンで、弁護士を振出しに1906年以来独立運動に加わる。厳格なガンディー主義者として知られ、独立前独立後を通じて、マドラス州首相、会議派書記長等要職を歴任した。自治権獲得(所謂独立)から完全独立(憲法制定、1950年)まで、インド人として初のインド総督。1959年スワタントラ党を結成(党首)、会議派脱退。

3 各州に来たるべきインド連邦への参加の選択権と、不参加州には独自に完全な独立国家をつくる自由を認めるクリップス提案(1942年3月30日)の直後に対案として発表された。またこの時期は、日本軍がインド・ビルマ国境に迫り日本軍のインド侵略の危機を目前にしていた時でもあり、インド国内の決定的な分裂を回避するために示されたもので、イスラム教徒の自決権要求を支持している。本論文は、この段階で執筆された。その後彼は、この線に沿って世論の醸成に努めガンディーの理解を取りつけた(43年3月)上で、Rajagopalacharya's Formula としてムスリム連盟総裁ジンナーに対して提示した(44年4月8日)が、拒絶された(44年6月30日)。(Beni Prasad 'Communal Settlement', Bombay, 1944, P. 3~5 など)

4 当時の議長は、Khan 'Ali Gul Khan

5 Jam'iyat al 'Ulama i Hind (the Indian Association of Muslim Clergy) 1919年以来のキラーフアット運動の中で、理論指導の中核としてイスラム僧('Ulama)を集めて結成された団体。キラーフアット運動の最盛期は勿論、衰退後も存続して会議派と共同歩調をとり、イスラム教徒大衆に反英と回印融和を説き続けた。1940年1月に会議派の第2次大戦に対する姿勢への支持及び非協力運動支援を決定。しかし、1942年には、ラージャーゴーパールチャーリーのパキスタン要求に対する譲歩案(本項註3)を支持し、イスラム教徒の自決権を要求するようになった。(W. O. Smith, ibid.)

6 the Ahrar Party 1930年、第2次非協力運動の時期に、パンジャブ州のイスラム教徒指導者が集まって結成した政党。イスラム教徒として統一インド案を支持し会議派に協力して非協力運動に参加した。30年代には大きな影響力を持った。しかし、40年以後会議の個人的不服従運動に参加して多くの指導者を獄中に奪われ、ムスリム連盟がパキスタン構想を打ち出す中で、最も進歩的な青年イスラム教徒は社会主義運動へ、保守派はムスリム連盟へと大きく二極分解し、僅

かな残党は会議派とムスリム連盟の間をさまよった。(W. O. Smith, *ibid.*, PP. 224~228 etc.)

7 Azad Muslim Conference 1940年3月デリーに於いて、会議派イスラム教徒、アフラル党、ジャミーヤト・アル・ウラマー等々の単一民族論を支持するイスラム教徒諸団体を集めてムスリム連盟のパキスタン決議(40年3月)に抗議するために結成された。ムスリム連盟とカークサル団(註1)を除く総てのインド。イスラム教徒諸団体が結集した。そして執行機関としてアザード・ムスリム評議会(the Azad Muslim Board)を設け、コミユナル問題解決を訴えた。しかし、1942年10月に至って同会議々長は、インド解放に関しては(連邦からの)離脱に関する自決権を有する言語州を内容とする憲法案を作製すみだ、と表明した。(W. O. Smith, *ibid.*, PP. 231~232)

8 このようにラージャーゴーパーラーチャリーの譲歩案(本項註3)が呼び水となって、パキスタン構想に反対し統一インド論を主張していたイスラム教徒諸団体は続々主張を翻し、42年末までにはパキスタン構想に反対し統一インド論に固執するイスラム教徒の団体は姿を消した。

9 本論文は1942年に執筆されたが、翌43年には補欠選挙が予定されていた。

5 インドは多民族国家

パキスタン構想と統一インド論の論争ばかりが表立つて、インドにはこれら二つの民族の紛争以外に民族問題はないかのように思われがちである。しかし、最初に述べておいたように、民族の基本的要素は言語であるから、インドには言語の数だけの民族が存在すると考えねばなるまい。スターリンは、インドの民族問題に関して、次のように言及している。

「インドはあたかも単一の民族からなっているかのように言われるのが常である。しかし、一度インドに革命が勃発すれば、従来無視されてきた非常に多数の民族が無名の淵から浮かび上がってくるであろう。それらの民族は、各々の母語と、固有の文化とを兼ね携えているに違いない。個々の民族が一般プロレタリア文化にどのように参加すべきかという問題に関しては、あくまで各民族語及び風俗習慣を保持した上でプロレタリア文化に参加すべきことは、議論の余地がない。」(レーニン主義, 1. P. 272)¹

(註)

1 出典不明。

(1)民族性の基盤

これについては先にも述べたが、民族性の問題を現実的に処理する場合には、宗教よりも言語の方に重点を置かねばならない。もし、同一宗教を以って民族性が成り立つものなら、エジプト、トルコ、イラン、アフガニスタンは一民族にまとまっているはずである。同じように、中国、日本、朝鮮についても、各民族の独自性を曖昧にとらえる人をしばしば見かけるのである。仮に「パキス

タン」を単民族国家の意味に解するならば、パキスタンについても事情は同じである。「パキスタン」をインドでイスラム教徒人口の過半数を占める諸地域という意味に解するなら、西パキスタンだけでも、一民族どころか最低十民族が存在することになる。それらの言語は、シンディー語、バローチー語、プラーワイー語、ムルターン語、西部パンジャブ語、パシュトー語、カシミール語、ダルド語、バルティー語、フンザ語¹であり、また東パキスタンでは、東ベンガル固有の言語が現に使用されている。すなわち、パキスタンというのは、11民族から構成される民族連邦ということになるのである。統一インドの名目でイスラム教徒の自決権を封じてはならないのと全く同様に言語問題をパキスタン国家の名の下に葬り去ってはならない。これについては辺境州の学校ではすでに教育媒介語として使用されているパシュトー語の例を先に挙げておいた。パンジャブ州のイスラム教徒の間でも、パンジャブ語に対する意識が急速に高まり始めている。遠からず、西パキスタンを構成すべきすべての民族が、固有の言語の使用を要求し、それを承認せざるを得なくなるだろう。そうなれば、ウルドゥー語は、単に各地域相互の共通語として残るだろう。東パキスタンのイスラム教徒達に対しても、パキスタン国家の大義名分を以って固有の言語を奪い、ウルドゥー語を強制してはならない。また一方では、パキスタンには11もの民族が存在するのだからイスラム教徒たちはパキスタン要求を取下げると、などと誤解をしてはならない。イスラム教徒がパキスタン要求を放棄するか否かは、インドで多数を占めるヒンドゥー教徒が、イスラム教徒に対して如何なる態度をとるか、もしくは、然るべき決意の程を示すか否かにかかっているのである。

パキスタン構想をかかげてパキスタン国家の民族的単一性を主張するのが誤りであると同様に、ビハール州の先住種族民²が単一の民族であると見なすことは、先住種族民差別反対運動を高めることにこそなれ、言語に基く民族州や民族自治区の確立には何の役にも立つまい。言語州や民族自治区実現の暁には、ビハール州内にムンダー族、アーラーンオ族、サンタール族、及びホー族の4先住種族民³の民族自治区が出来、各地域では、それぞれの多数民族の言語が、学校、法廷、議会で使用されるようになるだろう。

我々は人民支配の確立を願ひ、今次大戦をその人民支配を目指して戦っているというのなら、何をさし置いても、人民に文字を教え教育を与えねばならない。しかもできるだけ短時日に最も容易な方法で。このことを考慮するならば、民族固有の言語こそ大衆教育の媒介語とすべきことは明白である。固有の言語とは、赤坊が母親の乳を吸いながら習い覚えた言語のことである。いちいち文法書を読んで学ばねばならないような言語は、母語とはいえない。母親の乳を吸いながら言葉をおぼえていくうちに、文法は知らず知らず身につけてしまうものだ。文法は言語と不可分のものであつて、何も学者が作ったからできたものではない。ソヴィエト連邦が費した年月以内で、インドの4億の民に文字を教え教育を授けようとするれば、人民一人一人の母語を以って教育媒介語としなくてはなるまい。書籍、新聞、映画、ラジオを介して早急に普及することができる。ナーランダーのある少年のことを考えてみて欲しい。今日、この少年は、自分の母語であるマガヒー語でではなく、ヒンディー語で何もかも読まなくてはならない。7年間もヒンディー語を学んだとはいえ、新聞や他の極ありふれた文芸書を読みこなせない。しかも純粋ヒンディー語を書くということにいた

っては、これを14年間勉強した者でさえおぼつかないのだから、ましてその少年については言うに及ばない。この事が信じられないのであれば、高等学校や大学のヒンディー語専攻学生の試験答案を取り寄せて御覧になるがいい。

普段マガヒー語、マイティリー語、ボージブリー語⁴を使っている人々に、母語の代りにヒンディー語を押しつけたりしないで、彼らが現に使っている母語を教育媒介語としさえすれば、全く新しい展望が得られるのだ。すべての文盲の農民に、3日間で文字を習得させ、マガヒー語やマイティリー語、あるいは、ボージブリー語で書かれた本を直ちに手に取って読ませることができる。1カ月もすれば、本をすらすら読めるようになるに違いない。文字を覚えてさえすれば理解するのはわけないのだ。たまた長母音・短母音の書き間違え位はあるかも知れないが、文法上の誤りを犯すことはあり得ない。ヒンディー語だった7年、ことによっては14年かけてもできないようなことが、母語でなら1カ月で足りるわけである。

書籍、新聞、ラジオ、映画を利用するのに、これらの言語の使用人口が少なすぎるということには決してない。マガヒー語の使用人口は約400万であり、ボージブリー（マッリー）語を話す人口は実に1千万を越える。因に、人口450万のフィンランド、人口100万のアルバニア等の独立国と比べてみてほしい。これらの諸国では、大衆の教養のために、書籍、新聞、ラジオ、映画のすべてが駆使されているのである。戦後、実際に人民をして国の主としようというのなら、母語を普及するのに役立つ教材を使うのに何ら躊躇すべきではない。

ところで、そういった文献を持たない言語には、医学、工学、科学、哲学等の部門に関する専門用語がないのではないか、という疑問が出されるかも知れない。それは、へ理屈というものである。所詮ヒンディー語でも、専門用語はサンスクリット語や、他の諸言語からの借用でまかなっており、ヒンディー語を学習しているビハールの少年達は、10年、15年を費してそれむを覚えねばならないのであれば、それら諸言語でも、そのまま利用できるはずだ。他の言語から単語だけを母語の中に借用して使うのと、それら専門用語を母語以外の言語と一緒に習得するのとでは、それに要する労力に雲泥の差があることを銘記すべきである。母語を使用すれば、専門用語さえ覚えればよく、文法や慣用句などについて頭を悩ますことはないのである。

(註)

1 Sindhi インド・アーリアン支派の一。カラチ市を中心としてシンド地方で話され、言語人口は1961年現在パキスタンに約497万（今日のパキスタン人口の約12.5%）。インドは、インド・パキスタンの分離独立時に難民として移住した人口を中心に1961年現在約137万人の使用人口。文献、文学活動を有する。インドでは憲法記載の重要言語の一。ベルシア・アラビア文字の改良文字を使用。インドでは最近、デーヴナナーガリー文字を使用する動きがある。

Baluchi イラン支派の一。バローチスタン地方及び一部パンジャブ、シンド地方で話され、様々な方言を有す。言語人口は1961年現在約98万。

Brahui ドラヴィダ語族。東部バローチスタン地方（カラート及びチャガル）で話され、言語人口は約36万。周辺のバローチ語の影響を大きく受けている。

Multani インド・アーリアン支派の一。西部パンジャブ語（ラハnder語）の南部方言で、ムルターン市周辺で話される。言語人口は1921年現在約234万。

西部パンジャブ語 別名ラハnder語など。インド・アーリアン支派の一。西パンジャブ地方で話され、数多くの方言を有す。文字は、イスラム教徒はアラビア文字、ヒンドゥー教徒はランダー文字。言語人口は約709万。シンド語、カシミール語の影響大。

Pushto イラン支派の一。アフガニスタン及びパキスタンの西北辺境州で話される。言語人口約4,500万。なお、パキスタン約334万（1961年）。大別して南西方言、北東方言がある。パターン族の母語。

Kashmiri インド・イラン語派ダルド支派の代表的言語。カシミール地方で話され、幾つかの地域方言の他にイスラム教徒とヒンドゥー教徒の間に用語法。発音に大きな差異が認められる(?)。文字はアラビア文字。言語人口約150万。

Dardi 広義にはパミール地方からパンジャブ西北部にかけて話されるインド・イラン語派の一支派を指し3大方言を有するが、狭義にはそれらのうちの1つを指す。ここでは後者で、前述のカシミール語はこの狭義のダルド語の1方言である。

Balti シナ・チベット語族。カシミールのバルティスタン地方で話され、言語人口は1921年現在約15万。

Hunja 正しくは Burushaski 語、もしくは Khajuna 語と呼ばれる。パキスタンの西北辺境州の Hunza Nagar 地方に話される言語で系統不明の言語とされている。

2 先住種族民（印。adivasi、英。aboriginal tribes） 森林・山岳地帯に住み原始的な——外界の一般のインド人に比べて極めて遅れた——生活を営んでいる様々な少数民族の総称。太古にはインド亜大陸に広く居住していたが、アーリア人、ドラヴィダ人等によって森林・山岳地帯に追い込まれた、といわれる。生業は様々であるが、農業（その多くは原始的農耕）森林業（含狩猟）、手工業、臨時の未熟練労働などが主である。生活水準は極めて低い。

彼らは、外界と異質な独自の生活様式を保持して来たが、外界と断絶し孤立していたわけではない。彼らは、交易・雇用等を通じて外界と接した。そして、外界人（主にヒンドゥー教徒）は、彼らの後進性に乘じて彼らを不当な搾取・差別の餌食として来た。それ故、彼らのヒンドゥー教徒に対する反感は強く、抵抗運動や反乱がくり返されて来た。

容赦のない差別と悲惨な生活を課せられて来た点で、彼らは所謂不可触民と共通するが、彼らが独自の言語を有し個々の民族を構成している点は、不可触民と大いに異なる。

彼らは独立後「指定部族民(anusūcit jānājāti, scheduled tribe)」という法定用語が与えられ、1935年以後「指定カースト(anusūcit jāti, scheduled caste)」という法定用語が与えられた不可触民と併せて、政府の特別保護施策が加えられている。しかし、劣悪な生活条件、多方面に渡る差別待遇は是正されたとは言えない。

尚、インドの先住種族民は、居住地域・民族的見地から3つに大別できる。(i)北部、北東部山岳地帯及び東部辺境地帯に居住する先住種族民は、人種的に Mongoloid で、シナ・チベット語族系

の言語を話す（南アジア語族モン・クメール語派系やインド・ヨーロッパ語族アッサム語も混淆）。
(ロ)ガンジス平原とインド半島部（デカン高原）とを分断する中央丘陵・高原地帯（ヴィンディヤー山脈等）に居住する先住種族民は、人種的に Australoid で、南アジア語族系を基盤にインド・ヨーロッパ語族系の強い影響を受けた言語を話す。(ハ)インド半島西南端部丘陵地帯及びガーツ山脈に居住する先住種族民は、人種的に Negrito で、ドラヴィダ語族系の言語を話す。

本論文に言うビハール州の先住種族民は、(ロ)に該当する。

(“ Handbook on Scheduled Castes and Scheduled Tribes ”, Government of India, 1968 など)

3 Munda, muṛa, urāo (aran⁶, 英 Oraons) 各部族の母語, 言語人口 (1961年現在) は次の通り。ムンダー族: 南アジア語族モン・クメール語派ムンダーリー語 (Mundari), 約100万。サンタール族: 同サンタール語 (Santali), 約325万。ホー族: 同ホー語 (Ho), 約65万。アーラーンオ族: ドラヴィダ語族北ドラヴィダ語派クルク語 (Kurukh), 約114万。(“ Handbook ”, 前掲)

4 いずれもビハール州に話される。創刊号 P. 14, 15 の註(3), (7)を参照。

(2) ソヴィエト連邦の諸民族

ロシアでは、ツァー政府に代って人民支配を確立するや、ソヴィエト政府は、人民の識字化に努めねばならなかった。もしも、ソヴィエト政府が、ロシア語、アルメニア語、グルジア語、トルコ語等、半ダースにも満たない文語だけを教育媒介語とすることに拘泥していたなら、恐らく、今なお人口の4分の1さえ識字化できなかっただろう。たとえ読み書きはできたとしても、ヒンディー語を2年学んだビハール人のお粗末極まりないものだったに違いない。ソヴィエト政府は人民に新たな言語を教育するのではなく、日常使われている彼らの母語を用いて早急に人民を啓蒙しよう、と決断したのであった。ロシア領中央アジアの教養人は、長年、自らの母語を田舎じみたものとして蔑み、トルコ語の文語を読み書きに用いていた。ソヴィエト政府が、試みにそれを採用してみたが、それは中央アジア人民の母語ではなく、その文法、発音、慣用句の習得には、何年間も血のにじむような努力しなくてはならない代物であることが明らかになった。そこで、ソヴィエト政府は、文語トルコ語に対する幻想を捨て、5つの地方語——トルコマーニ語、カラーカルバク語、ウズベク語、キルギス語、カザク語——の採用に踏み切った。うちでカラーカルバク語の言語人口は高々5万人であろう。カザク地方、キルギス地方、ウズベク地方、トルコマーニ地方は、ソヴィエト連邦の16の所謂民族自治区に属し、ソヴィエト法の規定によって、随時、ソヴィエト連邦から離脱できることになっている。

ソヴィエト連邦には百を越す民族が存在し、同数の言語がある。多民族連邦であることは、何ら恥ずべきことではない、とソヴィエト人民は考えている。それどころか、このことによって、むしろソヴィエト文化が豊かになったと解している。今日、そのすぐれた成果を、我々は眼の当りにしている。ソヴィエトの家庭の食卓では、各民族の美味しい民族料理がいろいろと楽しめるし、ソ

ヴィエトの舞踊芸術は、グルジア、タージク、カザフなどの民族舞踊を吸収してすばらしい発展をとげた。ソヴィエト映画が築き上げられる過程において重要な役割を果たしたのは、ソヴィエトの様々な民族出身の芸術家達である。ソヴィエト文学の方面でも様々な民族出身の詩人の作品が翻訳され、それがソヴィエト文学にさらに活気を与え、洗練を加えてきたのである。その例として、次に2人の文盲の詩人を取上げてみよう。スタリスキー・スレイマン¹は、ダゲスタン（コーカサス）の文盲ではあったが天分に恵まれた生来の詩人であった。赤色革命以前にも彼は数多くの作品を書いていて、ペーグ（大地主）、ムッラー（イスラム教学者）、ツァーの廷臣に対する反抗を歌ったりしていた。ところが、当時は、スレイマンの素朴な詩を賞賛する者は1人も居なかった。赤色革命は、ぼろ布にくるまれていた宝石を取り出し、光り輝く機会を与えてやった。スレイマンは前にも増して詩作に熱中した。ダゲスタン語は、最早や田舎言葉ではなく、一個の民族自治区の民族語であった。学校で教えられ、役所の事務に用いられた。新聞や書籍もこの言葉で発行された。今やスレイマンの詩は、吟ずる後から虚しく消えていくものではなくなった。ダゲスタン語の新聞や本に印刷されたのである。スレイマンの詩がダゲスタン語で何巻にもなって出版されたが、そのうちのある作品のロシア語訳がゴーリキーの目にとまった。ゴーリキーは彼の作品に驚嘆し、スレイマンの詩を他にもロシア語に翻訳してもらって読んだ。そして、ゴーリキーの奨励を得て、スレイマン詩集全5巻が、ロシア語及びソヴィエト連邦の他の13、4の言語で翻訳出版されたのである。文盲の詩人スレイマンは、今や不朽の世界的詩人の1人である。晩年、スレイマンはソヴィエト議会の無競争候補者に推されたが、選挙の（1938年12月6日）わずか数日前にこの世を去ったのであった。

文盲のカザク人詩人、ジャンブル・ジャバーエフ²の詩の修業は、スレイマン・スタリスキーに似ていた。赤色革命の時にはすでに老齢に達していたが、やつとその時になって、彼は天与の才を示す機会を得たのである。もし、スレイマンやジャンブルの母語を田舎言葉だといってかたづけられてしまっていたなら、世界は類まれな詩才を逸していたに違いない。我国でも、過去幾世紀に渡って、幾人ものスレイマンやジャンブルを見遇してきた。人民が主権を握れば、このような天才を見遇するようなことはあり得ない。

ソヴィエト政府は、言語に基いた民族自治区を構成し、我々に絶好の範を垂れた。我国は民族問題を解決するには、ソヴィエトと同じ道を歩むべきだろう。

(註)

1 Suleiman Stalskii (1869~1937) ソ連邦のダゲスタン（カフカス）の遊歴詩人。貧農の子。放浪して肉体労働に従事、遊歴詩人の歌を聞いて自らもこれを試み、旧来の東方詩の型を破って貧農の苦悩と希求を表現した。文盲であったが、その歌は口から口へと広まり、10月革命後はその思想とテーマは更に拡大し、社会主義建設と祖国愛の歌い手となる。ゴーリキーは彼を<20世紀のホメロス>と名づけた。（『西洋人名辞典』岩波書店、1956）

2 Dzhambul Dzhabaev (1856~1945. 6. 22) ソ連邦の人民遊歴詩人。カザフスタンの遊牧者の子に生まれ、ドンブラ（絃楽器）を学び、遊歴詩人となった。革命前にはカザフ人

の苦しい生活と斗争を歌い、文盲であつたが数万行の歌を記憶していた。革命後は深いソヴェート愛国心と共産主義思想にみちた詩をうたい、ことに第2次大戦中の詩はソヴェート人に勇気を与えるものであつた。スターリン賞を受く(1941年)。(『西洋人名辞典』岩波書店、1956。)

(3) インドの諸民族

筆者は、民族を判定するに母語を試金石とすることを述べたが、母語とは、文法を習い覚える必要のない言語のことである。今や、この試金石を携えてインドを巡ってみななければならない。と同時に、インド・イスラム教徒がイスラム教徒多数地域のヒンドゥ教徒地域からの分離を強く主張している以上、彼らの要求を一蹴するわけにはいかない。また、このように見てくると前述したように、西パキスタンに9乃至10、東パキスタンに1——東ベンガル——というふうに計11の州もしくは民族自治区が成立することになることも銘記すべきである。ところが、パキスタン構想には、ハイデラバード、ラクノウ、アーンドラの若干の県等まで加えて青写真が作成されつつあるがそれは画餅にすぎない。非イスラム教徒多数地域をパキスタンに編入せよという判決を下す国際裁判所などどこにもないのである。双方の人口が互角で、多数派の判定に際し混乱のありそうな所では、全住民の成年男女による投票で決着をつけるべきだ。

今ここに、インド全土に於ける民族構成に従つて、全民族を新しい州もしくは民族自治区に編成することにする。この表は今のところまだ不完全である。言語は今後更に追加される可能性がある。

1 ビハール州

新州・民族自治区

地域言語

現行行政区

(1) マッラ

ボージプリー語

・チャンパーラー県、サーラン県、シャーハーバード県、(連合州では、ゴラクプル県デーヴリヤー郡、ゴラクプル県。バリヤー県。アザムガル県。ガージプル県の一部地区)

(2) ヴァッジー

(ヴァッジ語)

・ムザッファル県西部

(3) ヴィデーハ

マイティリー語

・ダルバンガー県、チャンパーラン県。バーガルプル県。プールニヤー県の一部地区

(4) アンガ

チカーチキー語¹

・バーグルプル。ムンゲール。プールニヤー県の若干の地区

(5) マガダ

マガヒー語

・パトナ県。ガヤー県。ハザリーバーグ県。ムンゲール県の若干の地区

(6) ムンダー

・(チョーター。ナーグプル)

- | | | |
|-----------|--------|-----------------|
| (7)アーラーンオ | | } (チョーター・ナーグプル) |
| (8)ホー | | |
| (9)サンター | | サンターパルガナー |
| (10)ラール | 西ベンガル語 | マーンブーブ, シインフブーム |

その他の現行州については単に民族自治区の名を挙げるにとどめる。

2 連合州

マッラ☆, (1)カーシー, (2)西アヴァド, (3)北アヴァド, (4)北ブラジ, (5)西ブラジ, (6)東クル (カーリー・ボーリー語地域), (7)ブンデールカンド, (8)クルマーチャル (東パハーリー語地域)

3 中央州

(1)チェーディー (ジャバルプル語地域), (2)南コーサル (チャッティースガル語地域), (3)ゴーンル, (4)ニーマール, (5)マールワ, (6)バゲールカンド, (7)北マハーラーシュトラ, ブンデールカンド

4 ラージプーターナー

(1)メーワール, (2)マールワール, (3)メーワール

5 デリー

(1)西クル (ハリヤナ語地域)

6 パンジャブ州

西クル, (1)東ペンジャブ, (2)西ペンジャブ, (3)西ヒマラヤ (西部パハーリー語地域), (4)カノール, (5)スピティー, (6)ラーフル

7 カシミール

(1)ジャンムー, (2)ラダーク, (3)ヴァルティスターン, (4)ダルドスタン, (5)フンジャー, (6)カシミール

8 辺境州

(1)パシュトゥー

9 バローチスタン

(1)バローチスタン, (2)ブラーフィー

10 シンド州

(1)シンド

11 ボンベイ州

(1)カッチ, (2)ソーラーシュトラ (カーティヤーワール語地域), (3)クジャラート, (4)南マハーラーシュトラ, (5)コーンカン, (6)カルナータク, (7)ダキニー

12 マドラス州

カルナータク, (1)トゥルー, (2)クルグ, (3)ケーララ, (4)ターミルナード, (5)アーンドラ

13 オリッサ州

(1)ウトカル

14 ベンガル州

ラール (西部ベンガル語地域), (1)中部ベンガル, (2)東ベンガル, (3)チャタグラーム (チッタゴン), (4)レブチャー, ゴールカー, シャルバー, (5)コーチ

15 アッサム州

東ベンガル, (1)アッサム, (2)ナーガー, (3)ガーロー, (4)カーシー, (5)ジャヤッティヤー, (6)マニプル, (7)ミストリー

16 プータン

(1)プータン

17 ネパール

(1)ゴールカー, (2)ネワール, (3)タマング, (4)タールー, (5)シャヴィー

18 共通語

(1)ヒンディー語, (2)ウルドゥー語, (3)英語, このように合計73民族が存在する。

原註☆ 重出の州・民族自治区には番号を付していない。

ヒンディー語は地方語としてはメーラート・コミッショナリーの言語である。文語ヒンディーや文語ウルドゥーは特定の州で話される言語というわけではなく、主要諸都市の市中で、あるいは都会の多くの家庭内で話される言語である。と同時に、これらの言語は、各地域間相互の共通語として用いられてきたし、また将来に渡って用いられるだろう。これらの共通語としての資格についていうならば、イスラム教徒多数地域ではウルドゥー語が、他の地域ではヒンディー語が主要共通語になろう。各地にこれらの言語を話す人たちのために特別の学校を設けねばなるまい。

数十万のアングロ・インド人 (英印混血人) などが英語を話す。彼らはインド各地に散在しているとはいえ、やはり各地に子弟教育のための英語による教育を受けられるよう学校を設けねばなるまい。

故郷を離れて、インド連邦のどこに住んでいようが、子弟が自分の母語で教育を受けられるよう特別の学校が設けられねばならない。²

大学の上級学年では教科書等を用意するに当り、学生数が僅少であると若干の不都合もあるだろうが、それは次第に解決できよう。学生は、母語に近い発達した言語で書かれた本で授業を受け、回答する場合は母語を用いればよい。もつとも、このような困難があるとすれば、言語人口が10万未満の場合に限られよう。

(註)

1 Chikachiki マイティリー語の一方言、南バーガルプル、北サンタールパルガナー、南ムンゲール地方に話される。

2 ラーフルは、本論文の論旨の多くをレーニン及びスターリンの民族理論に負っている。しかしながら、ここに示されたような、居住する土地に関係なく「学校事業を民族別に分割すること」については、レーニン等は強く反対している。このような案は、ロシアに於いては、190. 末から200. にかけての多民族国家オーストリア帝国の民族主義者の主張を援用して、ロシアのユダ

ヤ人労働者組織ブンド派が、「^{エキステリトリアーリナヤ}非属地的」(土地外の、すなわちあれこれの民族の居住する土地に関係のない)自治制案もしくは「文化的＝民族」自治制案として主張した。これに対するレーニン等の反対の理由は、それは一層労働者を分散させ、離間させ、弱め、労働者階級の利益に反する、というものであった。

くわしくは、レーニン著川内唯彦訳『民族問題にかんする批判的覚書他』(国民文庫117)大月書店、1953年、及び、スターリン著全集刊行会訳『マルクス主義と民族問題』(国民文庫203)大月書店、1953年を参照。

訳・註 遠藤 格、秦 智

パキスタン構想についての補足訂正

創刊号P. 14で、パキスタン構想は、1930年のムスリム連盟における汎イスラム主義詩人ムハammad・イクバルの「イスラム・ランド」提案に端を発すると言われる、とのべたが、この点に関して若干訂正をしておきたい。〔註者〕

ムスリム独自の代表権を保護する分離選挙制度は、1909年のモーリー・ミント改革で導入され、1916年のラクノー協定で国民会議派の承認を得たが、これを国民会議派は1928年に至つてネルー報告において否定した。この事実を背景に、同年サイモン委員会に対してムスリム連盟は、ムスリムのための分離選挙制度は勿論のことシンド州分割及び西北辺境地域(N. W. F.)に新州の創設を要求している。この要求は、さらに1930年末の第1次円卓会議においても示されている。(D. Keer, Dr. Ambedkar; Life and Mission, Bombay, 1971, P. P. 116, 121 f., 148, 152) このようなムスリム独自の州の要求の積み重ねの中に、イクバルの「ムスリム住民が過半数を占める北西インド(パンジャープ、北西国境州、スインド、バルチスターン)を、単一の‘State’に統合する‘North West Indian Muslim State’の樹立を北西インドのムスリムの最終目標とする」(加賀谷寛。前掲論文P. 47の‘Speeches and Statements of Iqbal’; P. 12からの引用)という示唆を位置づけるのが妥当だろう。前述の「端を発する」という表現は、パキスタン運動の展開を理解する上で、極めて不適切だと思われるのでここに訂正しておきたいと思う。